優秀賞

舞鶴の海に願いを込めて

山梨県　山梨英和中学校三年　清水　えみり

この夏、私は山梨から四百キロ離れた京都府の舞鶴市を訪れました。舞鶴港に隣接する大きなホールで開催された朗読会を鑑賞する為です。舞鶴港は終戦から昭和三十三年まで十三年に渡って、シベリア抑留者の引揚港として沢山の人々を温かく迎えてきました。朗読会は、極寒のシベリアで過酷な労働を強いられ、祖国の地を再び踏むことなく亡くなっていった人々の無念の思いや、日本で帰りを待っている家族の苦悶を描いており、一時間半の上演中、私はタイムスリップしたかのような不思議な感覚に浸っていました。

第二次世界大戦終結後、シベリア抑留者は「日本へ帰国させる」とソ連兵に騙され、日本とは逆の地へ移動させられました。厳寒の中、日々重労働に就き、劣悪な環境でまともな治療も受けられず、約六万人が命を落としていきました。日本にいる家族を心配させまいと本当のことを書かずに、「自分は大丈夫」と気丈に振る舞う手紙を送り、収容所の仲間達と励まし合い、「必ず生きて帰る」と希望を持ち続け、抑留者が最期まで力強く生き抜こうとする劇中の姿に、会場のあちらこちらからすすり泣く声が聞こえてきました。舞鶴港には連日多くの人が集まり、家族の生還を喜ぶ者と、辛い事実を受け入れなければいけない者とで様々な感情が溢れていました。生きて帰って来たことを「申し訳ない」と思わせるほど、戦争は人間の精神を破壊します。長い間罪悪感に苦しみながら、それでも前を向いて平和を願い続ける生還者の思いを、私はしっかり受け止めて会場を後にしました。

目の前に広がる舞鶴の海は、穏やかで静かに波打っていました。心地良い潮風を浴びながら、私は平和について考えました。戦争は愚かな行為であり、悲しみしか生まれません。戦地で散っていった尊い命が決して無駄にならないよう、私達はしっかりと過去を学ぶ必要があります。具体的に、今の自分にできることは沢山の場所に出掛けて、見たことや感じたことを周囲に伝えていくことだと思っています。先日、ある日本人オリンピック選手が「鹿児島の特攻資料館に行きたい」と話していました。「生きていることが当たり前でないと感じたいから」という理由を知り、私は心から感動しました。戦争が遠い昔の出来事として忘れ去られていくことがないよう、過去と未来を繋ぐ架け橋になることが、私達若い人間ができることではないでしょうか。そして、シベリア抑留者のように、戦場ではないところで亡くなった人達が大勢いたことも、平和を語る上で忘れてはいけません。私が見た舞鶴の海が、これからもずっと爽やかな風が吹き抜ける平和な港でありますように。